

吉備国際大学研究紀要
 (社会福祉学部)
 第20号, 31-40, 2010

ジョン・デューイと「個の確立」教育

米良 重徳

John Dewey and Education of the “Establishment of the Individual”

Shigenori MERA

Abstract

This thesis comes in fourth in my research career developed in relation to the “establishment of the individual.” This time, focusing on John Dewey, an American thinker, educator, and standard-bearer who advocated progressive education, the reference is made to consideration on how he made his way to seek education of the “establishment of the individual.”

Summarized by the “natural experimentalism” and the “child-centered education,” Dewey's thought excels in featuring the essence of education. Attracting too much attention, it was once denied practically due to the transient cause of the social situation. I myself, however, consider it to build the most important framework in education. In Japan as well, indeed it was worshiped during democratic education early in the postwar era, but it was discarded later on during the period of high economic growth when education was intended to produce the personnel efficiently to achieve the nation's goal, before reviving by the introduction of “Integrated Study.”

While undergoing ups and downs from now on, it is opportune time to reconfirm that his thought on education remains the centripetal force to sustain education of all time, for those who consider that it is the “establishment of the individual” that it takes in pursuit of happiness of mankind.

Key words : John Dewey, establishment of the individual, progressive education, Integrated Study

キーワード : ジョン・デューイ、個の確立、進歩主義教育、総合的な学習

はじめに

「アメリカ独立宣言」の前文には、アメリカの建国理念を示すものとしてしばしば引用される有名な言葉がある。すなわち「すべての人間は平等につくられている。創造主によって、生存、自由そして幸福の追求を含むある侵すべからざる権利を与えられ

ている。これらの権利を確実なものとするために、人は政府という機関をもつ。その正当な権力は被統治者の同意に基づいている。いかなる形態であれ政府がこれらの目的にとって破壊的となるときには、それを改めまたは廃止し、新たな政府を設立し、人民にとってその安全と幸福をもたらすのに最もふさ

わしいと思える仕方での政府の基礎を据え、その権力を組織することは、人民の権利である。」この言葉によると、アメリカという国は人々の平等と自由そして幸福の追求を最良の価値と位置づけ、その正当な権力は人々の同意によって与えられ、ふさわしくない権力は即刻人々の手によって変えられるものであるという宣言である。そこにはまず一人の個人がいて、その個人の存在そのものを肯定的なものとして捉え、その個人の存在価値をより確実なものとするために、個人自らが自分の考えを述べ、その総意によって良き政府を造り出すという民主主義的構造が浮かび上がる。つまり「個の確立」がなされている個人が良き政府の担い手になるべきであると。私が追求する「個の確立」の要素としては個人が経済的に自立していること、個人の良心に忠実であろうと自分自身を律することのできる自律性を備えていること、個の尊重即ち自分自身の存在ばかりでなく、他者の存在を認め、他者の意見を傾聴できる資質を備えていることなどが挙げられるが、ここでより大切なことはこれらの要素を持って自発的に、主体的に諸問題と取り組む積極的な姿勢を育むことである。これを「個の確立」教育と呼びたい。未開の地アメリカという国を独立宣言の趣旨に則って成長・発展させるためには「個の確立」が進んでいる人材が必要であると考えるのは当然の帰結であるが、建国当初のアメリカが国民の教育までに目が行き届くようになるためにはしばらく時間が必要であった。

1776年7月4日「アメリカ独立宣言」の発布、1788年7月2日「アメリカ合衆国憲法」の批准を公式に宣言、1789年4月6日ワシントンが初代大統領に当選し、ここに名実ともにアメリカ合衆国が成立し、その第1歩を踏み出した。その後西部開拓を通じて領土を拡大しながら発展を続けるが、北部と南部の経済構造の違いから起こる南北戦争（1861～1865）を経てようやく国家としての統一感が保たれ

るようになって、国家レベルで教育への目が開かれるようになった。上述のとおり教育理念の方向性は建国当初から定まっており、その具体的な方法論が公教育のレベルとして議論されるようになった。それがいわゆる進歩主義教育と呼ばれるものであった。様々な先駆的な試みがなされながら、何といてもその中心的推進者となったのがこの小論のテーマとなったジョン・デューイである。進歩主義教育とは何か、ジョン・デューイがその進歩主義教育をどのように引っ張っていったか、そもそもジョン・デューイの教育思想とは何か、そして戦後民主主義教育を進めていった日本の教育界に彼が与えた影響はどうだったかを検証しながら、「個の確立」教育に迫ってみたい。

第1章 進歩主義教育とジョン・デューイ

第1節 進歩主義教育とは？

市民革命を経て近代国家となったイギリスやアメリカ、フランスでは国家を支える人材としての国民を育成すべく、できるだけ多くの国民が参加できるよう健全で安価な公教育制度の取り組みを始めた。例えばイギリスでは産業革命後の資本主義経済の下、近代工場で働くための学校教育を受けた労働者を要求したし、アメリカでは民主主義が普及発達し、選挙による国民の政治参加が進む中、政治判断のできる国民を要求した。また近代化が遅れながらも国家造りを急ぐドイツではナショナリズムを昂揚させながら国民の意識の統制を要求した。欧米各国の学校制度の歴史的研究を行ったコロンビア大学のリースナー（E.H.Reisner）は、近代国家の教育制度を生みだした要因として、「産業革命」と「ナショナリズム」と「民主主義」の3つのものをあげている⁽¹⁾。これらの公教育制度の動きはいずれも19世紀後半に活発化し、それは国民国家の形成と重なり、国家主導の下、教師が多数の生徒を対象に同一の教育内容

を一斉に教授することを前提にしていた。この方法は教師中心の教え込みであり、子どもの自発的な活動を許さず、子どもの個性や個人差に応ずることができなかった。また、既存の教科の内容を伝達するだけでは、急激に変化しつつある社会の要請に応じられないことも明らかであった。そこで、子どもの自発性や個性に応ずるとともに、社会の要求にも応ずるように、学校教育を改革していこうとする新教育運動が起こった⁽²⁾。そもそもフランスでは市民革命に大きな思想的影響を与えたルソーが自身の著書「エミール」を通して、「個」に向き合う教育論を展開しており、ルソーが元祖新教育運動提唱者と呼ばれても不思議ではないほどである。また、元々何もなかったアメリカでは周知のとおり一人ひとりのパイオニア精神こそが国造りの最も重要な価値であることがはっきりしていたし、ヨーロッパ各地から押し寄せる多種多様な移民に対して教師中心の一斉授業が成り立つはずもなく、個性重視と個人差に配慮した新教育運動こそ最もふさわしい教育方法であった。

この新教育運動の指導理念は、指導者の理想によって、またそれに対応する社会的事情により、多少のニュアンスがみられるが、およそつぎのような概念に包括される。①児童中心主義、②全人主義、③活動主義、④労作主義、⑤生活中心主義。実際の運動理念は、これらの諸概念が補完しあって構成されているのが普通である⁽³⁾。この新教育運動はアメリカでは進歩主義教育と呼ばれ、その教育的価値が最もふさわしいアメリカにおいて発展成長し、全世界の新教育運動をリードすることとなる。もちろんその中心人物はこの小論の主人公であるジョン・デューイであるが、その先駆者としては「教育の秘訣は生徒の尊重にある」と訴えたエマソン(R.W.Emerson,1803-1882)、児童の本質を善と見なし、子どもの人間としての価値を尊重する態度を示したオルコット(A.B.Alcott,1799-1888)、「実物教授」

を提唱したオスウィゴ運動の推進者であるシェルドン(E.A.Sheldon,1823-1897)、「発達させられるべき児童こそが、教育の内容と方法を決定する」という視点に立ったパーカー(F.W.Parker,1837-1902)などが挙げられる。特にパーカーは後にジョン・デューイによって進歩主義教育の父と呼ばれた。進歩主義教育は発達させる対象であるひとりの児童をひとりの個人として尊重し、その主体性を重んじるという点で「個の確立」教育に通じるものである。進歩主義教育が民主主義教育を必要とするアメリカ合衆国で最も隆盛を極める所以がここにある。ジョン・デューイはこれら先駆者の影響を強く受けて、進歩主義教育をアメリカ全土のみならず世界の新教育運動を確固たるものとするのである。

第2節 ジョン・デューイとシカゴ実験室学校

ジョン・デューイは後年強い影響を受けるダーウインの「種の起源」が刊行された1859年にヴァーモント州の小さな町バーリントンで生まれた。1952年に92歳の高齢で生を閉じたが、18世紀の後半から19世紀の半ばまでアメリカのプラグマティズムの代表学者として、哲学・心理学・教育学・芸術論・社会思想・文明批評などの多方面にわたって活躍した。彼の父はイギリスから移住してきた開拓者の4代目で食料品屋を営んでいた。デューイは自ら働きながら小銭をかせぎ、15歳でハイ・スクールを卒業し、ヴァーモント大学に入学した。大学を卒業後ハイ・スクールや小学校の教師をしていたが、1882年哲学の研究を志してジョンズ・ホプキンス大学の大学院に入学した。1884年学位論文「カントの心理学」で博士学位を取得すると同時にミシガン大学の哲学の講師に就任、その後教授となる。1894年にはシカゴ大学に哲学・心理学・教育学を合わせた学部の部長として招かれた。この頃から人間の認識の発達や性格の発達に関心を持ち始めていたデューイは大学に物理学や生物学の実験室があるように、人間の精神

の発達について研究する実験室があってもよいと考え、1896年1月に実験室学校を開設することとなった。実験室学校はデューイがすべての観念は行動のための道具であり、思考は人間と環境との相互作用、環境を統制する努力の中から生まれ、かつ進化すると説く道具主義⁽⁴⁾の立場に立つものであり、当時隆盛しつつあった進歩主義教育に拍車をかけることとなった。実験室学校そのものはデューイのコロンビア大学への転出に伴ない1903年に閉校となるが、彼の指導する進歩主義教育は全米に広がりをもたせ、1919年に進歩主義教育協会が設立されて絶頂期に達する。

実験室学校は正式にはシカゴ大学附属小学校として始まった。当初は個人の家を借りて、生徒は16人教師が2人というこじんまりしたものだったが、1898年の秋に学校は2つの作業室と2つの実験室、かなり広い台所と食堂をもつ校舎に移り、生徒は82名までに膨れ上がった。翌年の4月デューイは生徒の親たちと学校の後援者たちを前にして、3年間の実験の報告を行い、今後の抱負を訴える。3回にわたるこの講演の速記が黄色い表紙の小さな本となって出版されたものが、すなわち「学校と社会」である⁽⁵⁾。「学校と社会」に収録された3回の講演録からシカゴ実験室学校の内容に迫ってみよう。第1回講演は「学校と、社会の進歩」というテーマである。この講演における彼の問題提起は学校の課業を現代社会の必要によりよく適合したものにするためにはどうすればよいかということである。曰く「社会生活の第一義的な必要条件のいくつかを子どもに納得させる媒介として、そしてまた、それらの必要が人間のしだいに成長する洞察と工夫とによって充たされてきた道程[の典型]として、要するに、それによって学校そのものを、そこで課業を学ぶための隔離された場所ではなく、生きた社会生活の純粋な一形態たらしめるところの手段として、考えねばならないのである。」⁽⁶⁾ 学校を経済的な

圧力から解放されている小型の社会と考え、だからこそここで生きる術を純粋に学ぶ教育の実験の場としたのである。第2回講演は「学校と、子どもの生活」というテーマである。この講演では学校の内部における子どもたちの生活および発達に対して学校がいかなる関係を有するかについて考察している。従来の教育が子どもを受身的な存在として捉え、知識詰め込みの画一的授業を行っていると批判して、ある種の変更を加えることの必要性を説いている。曰く「いまやわれわれの教育に到来しつつある変革は、重力の中心の移動である。それはコペルニクスによって天体の中心が地球から太陽に移されたときと同様の変革であり革命である。このたびは子どもが太陽となり、その周囲を教育の諸々のいとなみが回転する。子どもが中心であり、この中心のまわりに諸々のいとなみが組織される。」⁽⁷⁾ 第3回講演は「教育における浪費」というテーマである。この講演では在学中における子どもたちの生活の浪費を少なくするために、学校それ自体を1つ制度として組織の問題として考え、それをきちっと整えることの必要性を考察している。曰く「およそすべての浪費は孤立に帰因する。組織とは、事物が工合よく、屈伸性をもって、じゅうぶんにはたらくように、それらの事物を相互にむすびあわせることにほかならない。そこで、この教育における浪費という問題について述べるにあたって、私は、学校制度の種々なる部分が相互に孤立していること、教育の諸々の目的が統一を欠いていること、教科および方法が首尾一貫していないことにたいして諸君の注意をもとめたい。」⁽⁸⁾

3回の講演を通じてデューイが憂うことは、従来の教育では子どもが学校で学んでいることが日常生活に応用できないというものである。そうならないための新しい教育を実験しようとしているのがシカゴ実験室学校の存在価値である。

第3節 ジョン・デューイの影響力

(1) ドルトン・プラン

アメリカのヘレン・パーカスト女史はイタリアに渡ってモンテッソーリの自発性や自主性を重んじる教育手法を学び、ジョン・デューイの問題解決学習などの長所を取り入れて、独自の教育指導法を編み出した。1920年にマサチューセッツ州のドルトンという町のハイ・スクールで実践されたことからドルトン・プラン（正確にはドルトン実験室プラン）と呼ばれている。具体的には、生徒は自らに割り当てられて「アサイメント」(assignment)の学習を契約のかたちで教師から引き受け、助言者としての教師が控えている教室（実験室）で、自らに課した学業を自由に実験的に取り組んでいけるような学習形態が保障されたのであった⁽⁹⁾。この教育指導法は学習者の個人差に応じた個別指導であり、従来の画一的な指導法を排除したことにその特色が表れている。根本原理を「自由」と「協同」に置き、生徒自らが自分の望む学科を選びそして自分の適した速度で学習する「自由」が保障されるが、一方で生徒が直接所属している集団の賢明な参加者となるだけでなく、種々の集団とも絶えず交流させ、そのことによって成長する機会が与えられる「協同」の大切さも強調する教育現場となるよう配慮されている。

(2) プロジェクト法

1907年コロンビア大学に入学してジョン・デューイと再会したウィリアム・H. キルパトリックはデューイのもとで教育哲学を学ぶ決心を固め、それ以降1952年のデューイの死に至るまで共同研究者として緊密な交流を続けた。1918年キルパトリックが論文「プロジェクト・メソッド」を発表し、デューイによって定立された生活経験教育理論を具体的な方法原理として提唱したのがほかならぬプロジェクト法である。彼はプロジェクトを社会的文脈の中で全精神的・目的的活動と定義して、外面的な身体的活動だけでなく子どもの主体的な創造的思考をも含む

ものと考えた。そこでは子どもの学習が子ども自身の目的であり、自発的な活動として展開されることに力点が置かれている。キルパトリックの理論の中心は、「目的」、「計画」、「実行」と判断をすべて子ども自らが言い、活動するということである。そして、それは、これらの活動を通して、「協働の精神」のような一般的態度の学習である「付随学習」を生み出すことによって可能である、と考えられる。なぜなら「付随学習」によって、子どもたちは性格、態度や道徳を形成できるからである。そうすることでキルパトリックは、「プロジェクト」を外面的で、手仕事のなものから、内面的で、精神的なものへと高めたのである⁽¹⁰⁾。

(3) 進歩主義教育協会

アメリカにおける児童中心主義の教育のいっそうの発展を願って、1919年に「進歩主義教育協会」が結成された。1924年からは機関紙「進歩主義教育」を刊行するなどして、進歩主義教育運動を全米各地で組織的に指導し、1930年代のはじめには会員数が1万名に達するまでに成長した。デューイは初代名誉会長のC.W. エリオット(ハーバード大学元学長)の死後1927年に第2代名誉会長に就任した。協会は、進歩主義教育の原理を、①自然に発達する自由、②興味がすべての学習の原動力、③教師はガイドであり、仕事割り当て人ではない、④子どもの発達に関する科学的な研究、⑤子どもの身体的発達に影響をあたえるものに一層注意を払う、⑥子どもの生活の必要に応ずるために、学校と家庭が協力する、⑦進歩主義学校は教育運動のリーダー、という7項目にまとめた⁽¹¹⁾。1929年の大恐慌以来社会的問題がクローズアップされてくると、デューイらは社会改造をめざす人々の理論集団を形成し、1934年より雑誌「ソーシャル・フロンティア」を刊行し、児童中心主義教育を建設的な社会意識の育成の視点から補完するべく努力を重ねた。一方で子どもの興味や自発性を尊重するあまり、基礎的な知識や技術の習得が

十分にできないのではないかという声が少しづつ高くなり、進歩主義教育運動は1940年代から衰退に向かい、1955年協会はとうとう解散することとなった。

第2章 ジョン・デューイの教育思想

第1節 自然的経験主義

ジョン・デューイは一般に「デューイ・スクール」と親しく呼ばれたシカゴ実験室学校の取り組みなど進歩主義教育運動のリーダーとして、その名を全米に轟かせたが、研究者としてのスタートは既述のとおり哲学であった。哲学に裏付けられた教育思想を発展させたことがデューイのデューイたる所以、真骨頂とも言える。デューイは、自己の哲学を「経験的自然主義 (empirical naturalism)」あるいは「自然主義的経験論 (naturalistic empiricism)」と名付け、また、人間に焦点をあてて、「自然主義的ヒューマニズム (naturalistic humanism)」としている。それは、経験ひいては人間と自然との関係をこれまでの伝統的哲学のように分離や対立の関係としてとらえるのではなく、連続する相互的關係—相互作用 (interaction) ひいては契約関係 (transaction) —としてとらえているからである⁽¹²⁾。このようにデューイの教育思想が哲学的アプローチから生まれていることに注目したい。生物組織体としての人間が実際に生活している現実の世界こそ哲学で取り扱うべき世界であり、そこでの生き方や生活、ひいては理想的な存在のあり方を探求しようとしているのがデューイの経験としての哲学である。そして、デューイがこれまでの伝統的な理論的教育学に対して、「すべての教育は実践の様式である」として、実践的、すなわち実践的教育学を主張したのも、この哲学的人間観、ひいては世界観を基盤としているからである⁽¹³⁾。こうした考え方を基にデューイは教育を生活であり、成長であり、経験の不断の再構成であり、それ自体が社会的過程であると考えてシ

カゴ実験室学校でチャレンジしたのである。そこでは児童の経験それ自体が教材であり、したがって、学習は「為すことによって学ぶ」のである。こうして学校はいまや、たんに将来いとなまれるべき或る種の生活にたいして抽象的な、迂遠な関係をもつ学科を学ぶ場所であるのではなしに、生活とむすびつき、そこで子どもが生活を指導されることによって学ぶところの子どもの住みかとなる機会をもつ。学校は小型の社会、胎芽的な社会となることになる。これが根本的なことであって、このことから継続的な、秩序ある教育の流れが生ずる⁽¹⁴⁾。デューイの教育目的は人間存在の三つの重要な問題すなわち生活とは何か、われわれはいかに生きるべきか、生活とは何を意味するかに答えようとするものであるから、教育実践上のカリキュラムは子どもの生活や経験に関係づけることが肝要である。デューイによれば教育は経験の連続的改造であるから、デューイの説く「経験の連続的構成」としての教育、ひいては学校教育は、子どもが環境との相互作用を通して様々な知識や技術を習得し、それらを手段として絶えず変化していく新しい環境に役だたせ、そしてさらに、この環境への適応的調整作用を通して自己自身を修正・改造していくはたらきである⁽¹⁵⁾。

第2節 児童中心主義

ジョン・デューイが中心となって進めていった進歩主義教育のメインテーマは児童中心の教育ということである。デューイはこのことをその著書「学校と社会」の中で、天体の中心が地球から太陽に移されたコペルニクスの革命という言葉を使って、これからの教育は子どもが太陽となり、その周囲を教育の諸々のいとなみが回転するという表現を用いて説明している。この児童中心主義の教育思想が生れた背景について2つの側面から迫ってみたい。

1つは従来の伝統的教育方法の批判からである。欧米では市民革命を経てまずいち早くイギリスが産

業革命を起こし、他の諸国も19世紀の後半には産業革命を完了させ、それと同時に近代資本主義社会を成立させる中で国家造りを進めてきた。国家造りとは即ち産業を興すこととその担い手である人づくりに集約されると言っても過言ではないが、この時期にこれら欧米諸国が教育に力を入れ始めたのも当然の帰結である。いわゆる政府主導の公教育が組織化され始めたのである。その主な目的は資本主義的産業の担い手の育成であるから、まずは読み、書き、計算などの教科をいかに効率よく教えることができるかということそして政府にとってもっと大切なことは国民国家形成に欠くことのできないナショナリズムを高揚させることであった。そのために最適な教育方法として採用されたのが教師中心の集団的画一的斉授業であった。ところがこの方法は教師から生徒に対して一方的な教え込みであり、生徒の個性や個人差に応ずることができなかつた。また、既存の教科の内容を伝達するだけでは、急激に変化しつつある社会の要請に応えられないことも明らかになってきた。特にアメリカ合衆国ではこの時期にヨーロッパからの大量の移民の流入があり、言葉の問題も含めてもはや一斉授業ではとても教育効果が得られない状態となった。そこで教育を一人ひとりの生徒の能力に応じて個別化することが急務の課題となったことで、児童一人ひとりに向き合う姿勢が生れてきた。

2つ目はルネッサンス、宗教改革、社会契約論、啓蒙思想、市民革命という歴史的現象の底流に流れる個のめざめ、「個の確立」教育からの要請である。この流れで注目されるのはルソーの著した「エミール」である。「エミール」は架空の人物であるエミールという一人の子どもを中心に置いてその成長を真正面から取り上げ、それを体系化した世界初の教育書といってもよい。ルソーは同じ年の1762年に「社会契約論」を著し、そこに描いた新しい国家の担い手をエミールに託したということもできる。ルソー

の影響を強く受けたアメリカ独立宣言とフランス人権宣言は個人の自由と平等を高らかに謳い上げ、個人尊重の精神を鼓舞した。即ち市民革命を経た欧米近代市民社会ではそもそも一人ひとりの個人を尊重する精神がその底流にあるので、教育現場でもその対象となる児童一人ひとりを中心に考える思想が生れてきたとも言える。特にアメリカでは個の力を頼みとして、何もないところから社会を造り出していったフロンティア精神豊かなDNAが引き継がれていき、ごく当たり前に「個の確立」が進んでいったのである。そしてさらに重要なことは民主主義の発展である。建国当初からの2大政党制と選挙権の拡大が民主主義体制を確固たるものとし、そこでは自分の考えをしっかりと持ち、他者の考えも尊重することで社会の問題を解決することができる人材が求められたのである。一人ひとりの児童の個性を育む新教育運動がアメリカでは進歩主義教育と呼ばれて大きな花が開いた所以がここにある。そのことに最も貢献したのがジョン・デューイであることは言うまでもないことである。

第3章 ジョン・デューイと戦後日本の教育

第1節 戦後民主主義教育

戦争に敗れた日本の国造りはGHQ（連合国軍総司令部）の主導の下、政治的民主化と非軍事化を目的に進められ、1946年11月3日の日本国憲法の公布でその方向性が明確なものとなった。日本国憲法では前文の冒頭に「日本国民は、正当に選挙された国会における代表者を通じて行動し、」と民主主義体制を宣言し、第13条（個人の尊重、生命・自由・幸福追求の権利の尊重）で「すべて国民は、個人として尊重される。生命、自由及び幸福追求に対する国民の権利については、公共の福祉に反しない限り、立法その他の国政の上で、最大の尊重を必要する。」と明記され、個人尊重の精神が表明された。この憲

法の下に戦前の軍国主義的教育を改めるべく、教育基本法が1947年3月31日に公布・施行された。前文には「われらは、さきに、日本国憲法を確定し、民主的で文化的な国家を建設して、世界の平和と人類の福祉に貢献しようとする決意を示した。この理想の実現は、根本において教育の力にまつべきものである。われらは、個人の尊厳を重んじ、真理と平和を希求する人間の育成を期するとともに、普遍的にしてしかも個性ゆたかな文化の創造をめざす教育を普及徹底しなければならない。ここに、日本国憲法の精神に則り、教育の目的を明示して、新しい日本の教育の基本を確立するため、この法律を制定する。」とある。ここでも「個人の尊厳を重んじ」と個人尊重の精神が表明された。

こうした方向性の中で具体的な教育改革はまず公民教育の刷新から始まった。それは何よりも、アメリカの影響のもとに、「民主主義」の定着こそが急務であると考えたからである。この公民教育の教師指導書とも言われる「国民学校公民教師用書」(1946年10月5日発行)と「中等学校・青年学校公民教師用書」(1946年10月22日発行)の中に指導の方法として「問題法」という言葉があるが、この留意点として次のように書かれている。①児童や生徒に提出される問題は、その経験をもとに、具体的でなければならない。②問題がだんだん発展してゆくように考えること。③児童や生徒自身の解決を重んずること。ここで、「経験をもとに」と書かれていることに注目したい。これは明らかにデューイ的な経験主義思想の影響である⁽¹⁶⁾。また、児童や生徒自身の解決を重んずることとして児童中心主義を訴えるなど明らかにデューイの影響が見て取れる。結局この2書は発行直後に「社会科」が新設されることが決まったので、日の目を見ることはなかったが、デューイの影響はさらに「社会科」にも引き継がれていった。1947(昭和22)年に出された社会科の学習指導要領の第1章序論は、以下のような書き出しで始め

られている。「今度新しく設けられた社会科の任務は、青少年に社会生活を理解させ、その進展に力を尽くす態度や能力を養成することである。そして、そのために青少年の社会的経験を、今までよりも、もっと豊かにもっと深いものに発展させて行こうとすることがたいせつなのである。」この最初の社会科の学習指導要領は、第一学年から第十学年(高等学校第一学年)まで一貫した総合社会科を実施しようと考えていたわけであるから、このデューイ的ともいべき「経験」論で実施しようとしていたことになる⁽¹⁷⁾。このように個人尊重精神、児童中心主義を柱に始まった戦後日本の教育ではあるが、高度経済成長とともに経済効率至上主義が蔓延する中で、いつしか企業に滅私奉公する人材の育成に重点が置かれるように変質していった。

第2節 総合的な学習

戦後日本の教育が経済の担い手育成に偏重した結果、受験競争の過熱・いじめ・登校拒否・学級崩壊など教育現場の荒廃が進み、抜本的な教育改革の必要性に迫られた。「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」審議した中央教育審議会は、第1次答申「子どもに〈生きる力〉と〈ゆとり〉を」(1996年)のなかで「これからの学校教育においては、これまでの知識を一方的に教え込むことになりがちであった教育から、自ら学び自ら考える教育へと、その基調の転換を図り、子供たちの個性を生かしながら、学び方や問題解決などの能力の育成を重視するとともに、実生活との関連を図った体験的な学習や問題解決的な学習にじっくりとゆとりをもって取り組むことが重要である」という改革構想を提言した。教育の「基調の転換」をはかるというその改革構想は、学校5日制の実施、「総合的な学習の時間」の新設、教育課程の多様化、選択制の拡大といったことで具現化されようとしている⁽¹⁸⁾。「基調の転換」とはまさにデューイが言う「コペルニクスの転換」

であり、その他の中教審の第1次答申の文面もまるで100年以上も前のヨーロッパの新教育運動、アメリカの進歩主義教育運動を彷彿させるが、日本も今ここにきてようやく根本的な所から個人尊重の教育に目を向けようとしている雰囲気が出てくる。ちなみに1998年12月に特定非営利活動促進法（いわゆるNPO法）が成立し、個人尊重の精神を底流としたNPO運動が動き始めているのである。

この中教審改革の目玉である「総合的な学習」に注目したい。なぜなら「総合的な学習」こそデューイがシカゴ実験室学校（デューイ・スクール）で取り組んだ教育内容の日本版と言うことができるからである。「総合的な学習」の目的を一言で言うならば、「生きる力をはぐくむ」ということである。画一的な知識詰め込み型の学力重視の教育に対する批判からの出発である。中教審第1次答申では「生きる力」を「自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力であり、また、自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心など、豊かな人間性であると考えた」と述べている。新学習指導要領によれば、総合的な学習は体験的な活動を重視した問題解決学習と言い換えてよい。配慮事項として「自然体験やボランティア活動などの社会体験、観察・実験、見学や調査、発表や討論、ものづくりや生産活動など体験的な学習、問題解決的な学習を積極的に取り入れること。」とある。このような「生きる力」をはぐくむ「総合的な学習」の成否はやはり教師の力量しいてはその働き方にかかってくるであろう。なぜなら従来の教科教育では学習指導要領に沿って教師が上から下に教え込むような形態になるが、「総合的な学習」では教師が生徒から引き出すいわば双方向の形態となり、逆転とは言わないまでも、相当位置関係が変わってくるからである。教師の側にいわゆる「コペルニクス的転換」が求められるのである。教師の側に意識改革が求め

られるゆえんである。また、教師一人ひとりにも相当レベルの社会問題意識が問われるのもごく当然のことである。2002年4月から本格的に実施されるようになって、まだわずか7年の歳月しか経っていないので、教師の側の「コペルニクス的転換」はその改革の大きさもあって必ずしも順調に進んでいるわけではなく、まだまだ混沌状態にあるように見受けられるが、児童中心主義に立った個人尊重の精神を具体的な教育現場で実のあるものにしてほしいと願っている。

おわりに

ジョン・デューイの教育思想を語ればきりがないほどであるが、小論のテーマと関係深い象徴的な思想として自然的経験主義と児童中心主義の2つを取り上げた。いずれも「個の確立」教育になくはならない必要な要素だからである。人が経験から学び、成長するためには経験そのものが自発的・主体的な取り組みであることが大前提であることは言うまでもないことである。他者から命令されたり、勧められたりしてなされた経験は成功事例でも失敗事例でも本人に及ぼす影響はそれほど多くはない。特に学びのチャンスとなるケースがより多い失敗事例の場合、その理由を他者の所為にしてしまう傾向が強いからである。経験の学びをより効果的にするためには「個の確立」を根底から支える自発性や主体性の確保がまず必要であることを銘記したい。児童中心主義は個を尊重する精神からきている。アメリカ独立宣言やフランス人権宣言の中の個人の平等と自由を中核的思想として起こされた市民革命によって、専制主義から民主主義へと体制が変革されていった当然の帰結ということができる。また、「個の確立」は自らの経済的・精神的自立と自らの良心に向き合った自律が重要であることは言うまでもないことであるが、それと同時に他者という個を尊重する精神も等しく重要な要素であることから、児童中心主義が

「個の確立」教育にふさわしい精神であると論じることができる。このようにデューイの教育思想が「個の確立」教育に明らかに貢献していると考えてもらうことができれば、この小論の意図が伝わり、喜びもひとしおである。

一方でデューイが推し進めた進歩主義教育あるいはデューイそのものが批判的にさらされ、一旦は歴史の表舞台から遠のいてしまった歴史的事実も見過ごすことができないものがある。日本でもデューイの影響を受けた戦後民主主義教育がいつか経済効率至上主義に取って変えられ、そしてそこから起こる様々な教育上の問題を克服するために考え出された「総合的な学習」は再びデューイ思想に回

帰したものと言うことができるが、それすらもわずか数年後に見直しが入るようになった。児童中心主義の結果招くものとして常に語られるのが学力低下、規律の乱れ、公共精神の退廃などの負の部分があるが、確かに教育においては教師側がある目標を定めて、児童をそこまでに引き上げようとする上からの引っ張り上げも大切な部分であることは間違いないことである。要は教育においては児童中心主義か教師中心主義かの二者択一ではなく、必要に応じての取捨選択ではないかと考えられる。ただ、本質的に成果の見えにくい教育という現場で、目に見える成果のみに振り回される愚行だけは犯したくないものである。

引用文献

- (1) 江藤恭二他 (1999)「西洋近代教育史」第9版 学文社 東京 pp.178
- (2) 柴田義松・斉藤利彦他 (2000)「近現代教育史」第1版第1刷 学文社 東京 pp.67
- (3) 江藤恭二他 (1999)「西洋近代教育史」第9版 学文社 東京 pp.220
- (4) デューイ著宮原誠一訳 (2008)「学校と社会」第66刷 岩波書店 東京 pp.200
- (5) デューイ著宮原誠一訳 (2008)「学校と社会」第66刷 岩波書店 東京 pp.197
- (6) デューイ著宮原誠一訳 (2008)「学校と社会」第66刷 岩波書店 東京 pp.26
- (7) デューイ著宮原誠一訳 (2008)「学校と社会」第66刷 岩波書店 東京 pp.50
- (8) デューイ著宮原誠一訳 (2008)「学校と社会」第66刷 岩波書店 東京 pp.80
- (9) 江藤恭二他 (1999)「西洋近代教育史」第9版 学文社 東京 pp.244
- (10) 陳 曦 (2003)「都市におけるキルパトリックのプロジェクト・メソッドの特徴に関する考察」－農村における実践例との比較を手がかりに－ 都市文化研究1号 pp.13
- (11) 柴田義松・斉藤利彦他 (2000)「近現代教育史」第1刷第1版 学文社 東京 pp.71
- (12) 對馬登 (2005)「デューイの経験的自然主義と教育思想」初版第1刷 風間書房 東京 pp.5
- (13) 對馬登 (2005)「デューイの経験的自然主義と教育思想」初版第1刷 風間書房 東京 pp.6
- (14) デューイ著宮原誠一訳 (2008)「学校と社会」第66刷 岩波書店 東京 pp.31
- (15) 對馬登 (2005)「デューイの経験的自然主義と教育思想」初版第1刷 風間書房 東京 pp.122
- (16) 杉浦宏編 (2004)「日本の戦後教育とデューイ」第2版 世界思想社 京都 pp.30
- (17) 杉浦宏編 (2004)「日本の戦後教育とデューイ」第2版 世界思想社 京都 pp.33
- (18) 柴田義松・斉藤利彦他 (2000)「近現代教育史」第1版第1刷 学文社 東京 pp.170